

喉頭痙攣による無呼吸発作に対して抗コリン薬の吸入が奏功した乳児例

久保田 慧 井手 康二 坂口 崇
後藤 綾子 西間 大祐 児玉 隆志
堤 信 松本 一郎 西間 三馨
廣瀬 伸一

福岡大学医学部小児科

要旨：症例は3ヶ月男児。感冒症状の後にチアノーゼ、低酸素血症、徐脈を伴う無呼吸発作を1日3～5回繰り返し、用手換気を要するため入院した。感染症、痙攣性疾患、心疾患、代謝疾患の鑑別を行ったが異常なく、喉頭気管支鏡検査で喉頭痙攣と診断した。喉頭痙攣を来たしうる SCN 4A 遺伝子の突然変異に有効なカルバマゼピン内服を2週間行ったが、後日判明した遺伝子解析結果で変異はなく、発作頻度も増加し中止した。24時間 pH モニター検査で胃食道逆流と診断し、プロトンポンプ阻害剤を開始するも無呼吸発作は持続した。気管切開も検討したが、喉頭痙攣が迷走神経を介した延髄反射であることを考慮し、抗コリン薬の吸入を行ったところ、開始翌日から発作強度及び頻度は明らかに軽症化した。退院1年後に吸入を中止しても無呼吸発作を起こさず約1年経過している。

喉頭痙攣に対する抗コリン薬の吸入は気管切開など侵襲的治療を減らせる可能性があり、新たな治療法になり得る。

キーワード：喉頭痙攣, 抗コリン薬, 胃食道逆流, 乳児